

聖書から読み解く一映画『インターステラー』鑑賞ガイド

第①回 SF 映画に宿る聖書の世界—五つのテーマで読み解く

クリストファー・ノーラン監督の映画『インターステラー』（2014年公開）は、一見すると科学と物理学を前面に出した SF 作品ですが、その奥には深い宗教的モチーフ、特に聖書の物語と対応しているテーマが数多く含まれています。

本記事では、聖書的視点から本作を鑑賞するための5つのテーマを取り上げ、それぞれが聖書のどの部分と関係しているのかを解説します。

1. 「地球からの脱出」と出エジプト—旅立ちの信仰

『インターステラー』の物語は、滅びゆく地球から新天地を求める人類の旅から始まります。この構図は、出エジプト記におけるイスラエル民族の旅と対応しています。

聖書の対応箇所：出エジプト記 13～14章

モーセに率いられたイスラエルの民は、奴隷の地エジプトを後にし、荒野を経て約束の地を目指しました。

映画との共通点：

明確な目的地は見えないが信じて進む。

危険と不確実性の中で選択を迫られる。

導き手（映画では NASA の計画、聖書では神）が方向を示す。

権力に抑圧された状況の中で、希望の計画が密かに進められる。

信仰とは、見えない未来に向かって歩む勇気でもあります。映画における旅は、この信仰の姿を現代的に描き出しています。

興味深いのは、映画の中で NASA が政府に隠れて活動しているという設定です。

表向きは宇宙開発が否定された世界の中で、密かに希望の計画が進められている——この構図は、圧制下のエジプトで産み育てられたモーセが、民を解放する使命を密かに準備されていた物語と重なります。

「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。」（ヘブル人への手紙 11 章 1 節）

2. サクリファイス（犠牲）と救済—十字架の愛

物語の後半、主人公クーパーは仲間と人類全体を救うため、自らの命を危険にさらす決断をします。この姿は、新約聖書におけるキリストの自己犠牲と対応しています。

聖書の対応箇所：ヨハネによる福音書 15 章 13 節

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」

映画との共通点：

個人の安全よりも全体の救いを優先。

自己犠牲が物語の転換点となる。

愛と使命が最終的な行動の原動力になる。

キリスト教では、犠牲は敗北ではなく、最大の勝利の道です。クーパーの行動もまた、その象徴となっています。

3. 愛は時空を超える—ローマ 8 章の愛の勝利

『インターステラー』の核心は、「愛は時間や空間を超えて届く」というメッセージです。これは、聖書が語る神の愛の普遍性と重なっています。

聖書の対応箇所：ローマ人への手紙 8 章 38～39 節

「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるもの

も、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」

映画との共通点：

父と娘の愛が物理的な隔たりを越えて繋がる。

科学では説明しきれない力が運命を変える鍵となる。

「愛は測定不能だが、現実には作用する力」として描かれる。

ここでの愛は、単なる感情ではなく、人類を救い、未来を切り開く根源的なエネルギーとして表現されています。

4. 新しい天地と黙示録的モチーフ—終末からの希望

滅びゆく地球を離れ、新しい居住地を求める物語の構成は、黙示録に描かれる「新しい天と新しい地」と対応しています。

聖書の対応箇所：ヨハネの黙示録 21 章 1 節

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。」

映画との共通点：

古い世界の終焉と新しい世界の始まり。

絶望の中から生まれる希望。

人類が新しい地で再び生きるビジョン。

この構成は、単なる生存ではなく、刷新と再創造の物語としての色彩を強めています。

5. 「選ばれた者」と使命—神の召命

物語では、ごく限られた人々が人類の未来を託されます。この「選ばれた者」の

モチーフは、聖書全体に繰り返し現れるテーマと対応しています。

聖書の対応箇所：創世記 12 章（アブラハムの召命）、出エジプト記 3 章（モーセの召命）など

映画との共通点：

他の人にはできない使命を担う者が選ばれる。

個人的な欲望よりも共同体の救いが優先される。

使命遂行には犠牲と信頼が不可欠。

聖書において召命は神から与えられるものですが、映画では人類の希望を託す使命として描かれ、その重みと孤独が強調されています。

結び—科学の物語に宿る信仰のかたち

『インターステラー』は科学的な理論や物理学をベースにしていますが、そこに込められた「旅」「犠牲」「愛」「新天地」「使命」というテーマは、聖書の物語と明確に対応しています。

この視点で観ると、この映画は単なる SF ではなく、現代版の出エジプト記であり、ロマ書であり、黙示録でもあると感じられるでしょう。

科学が舞台を整え、信仰的なモチーフが魂を動かす——それが『インターステラー』の魅力の核心です。

次章では、この映画が重力という物理現象を通して描く「愛」と「神の栄光」のテーマを掘り下げる。

第②回 重力と愛と神の栄光

映画『インターステラー』には、「四つの力のうち重力だけが次元を超える」という象徴的な言葉が登場します。

物理学の世界では、重力は他の力に比べて極端に弱いにもかかわらず、宇宙全体を形づくり、逃れることができない普遍的な力として存在しています。

本作では、この「重力」が単なる自然現象を超えて、人の「思い」や「愛」と結びつき、時空を超えて働くものとして描かれます。

父と娘の愛（クーパーとマーフィー）が時空を越えて届くのは、この「重力＝愛」の比喩そのものです。また、ブラント博士がエドモンドへの愛を告白する場面は、たとえ相手がすでにこの世を去っていても愛が消えないことを示しており、「愛はいつまでも絶えることがない」（コリントー 13：8）という言葉と呼応しています。

聖書の中にも、この「重力的な性質」を思わせる表現があるので、今回は、いくつかの聖句を手がかりに、重力と愛と神の栄光を結びつけて考えてみたいと思います。

1. 見えないが確実に働く信仰

「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。」（ヘブル人への手紙 11 章 1 節）

重力は目に見えませんが、確実にすべての物体に作用します。同じように、信仰も目に見えない力でありながら、人の歩みを方向づけ、人生を支える力となるものです。

クーパーが娘マーフィーとの絆を信じて行動し、最後に人類の未来を切り開いた姿は、見えない力に従う信仰の姿と重なります。

2. 永遠に残る愛

「愛はいつまでも絶えることがない。」（コリント人への第一の手紙 13 章 8 節）

重力が宇宙のどこにでも及ぶ普遍的な力であるように、聖書は愛の永遠性を語ります。

時空を超えて働く愛は、宇宙の法則を超えて働く重力と同じように、決して消えることはありません。

この映画の根底に流れるテーマ、父と娘の愛、男性と女性の愛は、まさに永遠性を象徴していると言えるでしょう。

3. 引き離せない神の愛

「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」（ローマ人への手紙 8 章 38～39 節）

重力から逃れることができないように、神の愛もまた人間を確実に引き寄せる力として描かれます。

この「抗うことのできない愛の引力」は、『インターステラー』における「愛が運命を導く力」と強く共鳴しています。

4. 栄光 = 重さとしての神の臨在

聖書のヘブライ語で「栄光」を意味するカーボド (כָּבוֹד, kâbôd) には、「重さ」という原義があります。この語はまた「輝き」「尊厳」とも訳され、神の臨在そのものの重みと光を同時に表す言葉です。神の栄光は圧倒的な臨在として人を打ちひしぎながらも、同時に引き寄せる力を持つものとして理解されてきました。

つまり、神の栄光 = 重さ = 引力というイメージは、重力そのものを想起させます。

これはまさに、この映画が示す「重力は次元を超える」という主題を聖書的に解釈するためのヒントになるでしょう。

結び—重い「思い」、そして「愛」

ここまで見てきたように、重力は「見えないが確実に作用する力」として、信仰・愛・神の栄光という聖書のテーマと深く響き合っています。そして、これは東洋的な感性とも通じます。

日本語の「重い」と「思い」が通じるように、重力の比喩は人の「思い」、とりわけ「愛」と深く関わります。

愛は人を引き寄せ、決して切れず、時空を超えて永遠に残る——その姿は重力の性質とよく似ています。

映画『インターステラー』が描いた「重力=愛」の構図は、聖書の言葉で言えば、見えない信仰（ヘブル人への手紙 11 章 1 節）、永遠に残る愛（コリント人への第一の手紙 13 章 8 節）、決して引き離せない神の愛（ローマ人への手紙 8 章 38～39 節）、そして重さとしての栄光（カーボド）、これらと対応しています。

この映画は、単なる科学的空想を越えて、永遠なる神の愛と栄光を示唆する作品として読み解くことができるのです。

「重い（重力）」は「思い」に通じ、

人の「思い」は次元と時空を超越する

次章では「重力と生命の秩序」というテーマから、神の創造の御手が映画の中にどう刻まれているかを考えます。

第③回 神の創造と重力 = 生命の秩序

映画『インターステラー』は、重力を単なる物理現象としてではなく、次元を超えて人類を導く鍵として描き出しました。

前章では、この「重力」を「愛」や「神の栄光」と対応させて考えましたが、さらに深めていくと「生命の秩序」にまでつながります。

実際、現代の科学的研究でも、重力がなければ動物の受精や胚の発生はうまく進まないことが分かってきています。これは、重力が生命の根幹に深く組み込まれた秩序の一部であることを示しています。

聖書に描かれた神の創造物語と照らしあわせると、この関係性がより鮮明になります。

1. 創世記の秩序と重力

創世記の1章は、宇宙と生命が秩序をもって創造されたことを繰り返し強調しています。

「混沌から秩序へ」という流れは、現代の物理学でいう「重力によって宇宙が形づくられる構造」と響き合っています。

星や惑星が重力によって形を保ち、地球がその秩序の中で生命を育む場になったのは、まさに神の創造的秩序の現れと見ることができます。

2. 生命誕生に不可欠な重力

微小重力環境での実験では、魚や両生類において受精後の体軸形成に乱れが生じやすいことが報告されています。哺乳類における着床や妊娠の過程についても、重力が大きく関与していると考えられており、現在も研究が続けられています。

つまり、生命が世代をつなぐためには、重力という「見えない秩序の力」が必要不可欠なのです。

これは、神が「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」と命じられた創世記1章28節の祝福が、物理的にも重力という法則に支えられていることを示唆しています。

3. 重力 = 秩序 = 神の摂理

聖書には、神の性質として「秩序」が示されています。「神は無秩序の神ではなく、平和の神である」（コリント人への第一の手紙14章33節）という言葉は、礼拝の場の秩序を語る文脈で記されたものですが、同時に、神がすべてにおいて混乱ではなく秩序を本質とされることを示しています。

重力は、見えないながらも、宇宙と生命に秩序を与える法則です。それは単なる自然現象ではなく、神の創造と摂理を体現する力と考えることができます。

映画『インターステラー』で「重力が人類を導く」という描写は、この「秩序としての重力」が持つ聖書的意味と結びつけて解釈できるでしょう。

4. 愛と重力と創造のつながり

第一章で見た「旅・犠牲・使命」、第二章で扱った「愛と重力と栄光」、それらがすべて「創造と秩序」というテーマに集束していきます。

重力は宇宙を形づくる秩序

重力は生命の受け継ぎを可能にする秩序

重力は愛や思いを象徴する次元を超えた力

こうして「創造と秩序」「愛と重力」「神の栄光」というテーマが一つにつながります。

この観点から見たとき、映画『インターステラー』は、現代における「創世記的黙示録」として読み解くことができるのではないのでしょうか。

結び—生命の秩序に刻まれた神の手

『インターステラー』が描いた「重力の次元超越」は、単なるSF的アイデアで

はなく、聖書の創造観と重なる深い洞察を秘めています。

生命は偶然に支えられているのではなく、重力という秩序に包まれ、その秩序は神の創造の御手の現れです。

この映画は「科学が示す生命の限界」を通して、逆に「聖書が語る神の秩序と愛」を照らしてくれます。